献　　詞

この記念論文集は平成14年３月に満期退職された東晧傳（地理学）および上領英之（経営財務論）両教授に謹呈する目的で編集されたものである。

東晧傳先生を，地理学および都市論の担当教授として，国立広島商船高等専門学校から本学にお迎えしたのは昭和60年（1985年）であった。故佐伯岩男先生の後任であった。先生はこの時点ですでに54歳であったが，本学にあっても，内海海運論，港湾地理，内海地誌研究，あるいは地理教育論と幅広い分野でご研究を続行された。商学分野の研究フレームワークとはいささか異なる方法論を展開されたが，その研究スタイルがかえって商学分野の研究者たちには斬新であったといえよう。

たとえば「仏壇製造業の地域性」（『修道商学』第36巻２号，広島修道大学，1995）は，広島の伝統産業である仏壇産業の現状とそれを取り巻く国内外の環境に触れたものであるが，部外者にはほとんど未知の世界である製造技法にまで言及したものであった。当時アリゾナ州立大学から商学部に派遣交換教授として来学していたD.マクタガート教授（地理工学）が東先生の仏壇産業研究に接触して強い関心を示していたことを今でも思い出す。外国人はおろか日本人でさえもほとんど知らない伝統産業の仕組みを掘り起こし，地域産業としての伝統工芸産業の生成と衰退を試論されたご研究はまさに東先生ならではの感性を感じさせるものであった。

故佐伯先生は生前，地誌研究と地理学の統合の重要性を方法論的に提唱されたが，後任の東先生はそれを徹底的に実践し実証し続けた。実に

行動力に富んだ地理と地誌の研究者である。特に瀬戸内海の海運と地勢に関連した一連のご研究の成果は今後の若手研究者にとっても貴重な資料となるに違いない。しかも，東先生の場合は歴史地理学の教育実践にも踏み込まれた。この点で，佐伯先生の方法論的提唱にさらに豊かな色彩を施したご功績も忘れるべきではないだろう。

門外漢の小職には想像の域を出ないが，地理分野でも，他の社会科学同様に，理論的精緻さや仮構されたモデルの美しさを競うようになっているに違いない。そうした風潮にあって，東先生の研究姿勢は「実査のない虚構の科学は必ず破綻する」という警鐘を鳴らす作業であったし啓蒙活動でもあっただろう。言葉を換えて言うならば，足腰の強い学問研究の必要性という，先生の全研究生活を通じての指摘を私たちは今こそ謙虚に受け止めるべきなのである。

東先生の朴訥で気取りの無い教育活動もなかなかに味わいの深いものであったことは万人の認めるところであろう。学生との交わりを大切にされ，常に学生と同じ高さの視点から教育される姿は印象深いものがあった。先生の田園的素朴さに触れて何とも形容し難い親近感を抱いた教員も少なくなかったはずである。

上領英之教授を九州産業大学から割愛させて戴いたのは，東先生に遅れること１年の昭和61年（1986年）４月であった。経営経済学者ハックスやシュマーレンバッハの直弟子であった田淵進先生（経営財務論）のご転出後の後任人事であったと考えてよいだろう。当時の商学部長であった岸悦三教授（会計学）の「商学部にはどうしても経営財務の専任が不可欠」との強い願望から，上領先生をお招きするために岸先生のご苦労とご腐心に教務主任としてお付き合いさせて戴いたことを今でも鮮

明に記憶している。

上領教授のご研究業績として鮮烈な光芒を放っているのは，あくまでも私見であるが，何と言っても昭和45年（1970年）の『弾力性経営研究分析』（金融財政事情研究会）に代表される一連の経営要素の関数関係を統合されようとするご研究ではないだろうか？　簿価・市価対応型の比較分析といい，価値的生産性・物的生産性の内省化モデルといい，40代前半という研究者としてもっとも油の乗りきった時期のご研究は私たちの肺腑を突く言説に満ちている。

上領教授の一連のご研究は浅学の小職にはあまりにも難解で複雑である。しかし，先生は，長い研究生活を通して，構造的に不連続ないし分離されている経済事象をインテグレートする方法論を発見されようとしているのではないか，というようにも感じられる。

たとえば生産関数の概念である。凡庸な思考力で考える限り，最低費用をもたらす生産要素の組合せは単に技術的関係だけでなく，限界生産力均等の法則を利用した価格関係の分析が避けられないように思われる。つまりマクロ成長モデルにミクロの価格モデルは適合し難いということである。その限りではミクロとマクロの統合的分析はかなりの困難を伴うだろう。静学的分析と動学的分析，短期モデルと長期モデルというように経済学はある意味でこうした不連続な世界のインテグレートを放棄してしまった感がある。

先生のご研究の収斂するところはこのような科学の現実的妥協と堕落の克服なのだろう。明治以降の伝統的な財務論，あるいは，ドイツ経営経済学的な経営分析，その多くは俗論化しモデルそのものの無批判な受容に終始している危険性がある。こうした経営分析論の学問的危機に対して異を唱え新機軸を打ち立てる情熱こそが先生の研究を支えてきたの

であろう。それは学問の原点である。権威を乗り越え定説を疑わない限り学問の進歩はありえない。この点で私たちが先生から学ぶべきものは非常に多い。

統合的な方法論の追求は，おそらく，先生の私的な生き方や人間性にも及んでいると思われる。ご自分の私生活においても，聖と俗とか，倫理と快楽，ロゴスとパトス，といった相反的な要素を統合されて行くことを常に実践なさっているのであろう。厳しい修練を達成されて信仰心を深められながら，決して周囲に自己の倫理観や信仰を強制したりしないという自己規制的な日常生活は見事という外はない。

先生は物惜しみをなさらず鷹揚である。先生は人情家である。率先してチャリティーとボランティア精神の発揮に努めている。そのような上領先生のことを知る人も少なくない。「自我の統合」というフロムの有名な学説があるが，上領先生はまさにこの安定した人格的存在なのである。

豊かな発想力と朴訥としたお人柄で周囲を微笑ませた東教授。ストイックな生活態度と世俗的な呵呵大笑とを共存させた上領教授。ご定年による退職とはいえ，いまこのお二人の先生が学窓を去られるのは誠に淋しい限りである。両先生が今後もご健康に研究生活を続けられることを心から願って，商学部教員一同を代表してこの詞を献呈する。

商学部長　藤　田　楯　彦